

特別史跡　名護屋城跡並びに陣跡

古田織部陣跡発掘調査概報　2

1992年

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第107集

特別史跡 名護屋城跡並びに陣跡

古田織部陣跡発掘調査概報 2

1992年

佐賀県教育委員会

序

文禄・慶長の役(「壬申・丁酉倭乱」1592~1598年)に際して、豊臣秀吉によって築かれた名護屋城と120ヶ所以上に上る諸大名の陣屋の跡は、その多くが400年を経過した今も良好な状態で残存しており、名護屋城跡と19の陣跡が特別史跡に指定されています。

本県では、この壮大な遺跡群の保存と活用のため、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」に取組んできました。豊臣秀吉の甥にあたる豊臣秀保の陣跡から始めた発掘調査や環境整備は、堀秀治陣跡、加藤嘉明陣跡と順次に進め、一方では、400年の年月に痛みが激しくなった名護屋城跡石垣について危険箇所の修理事業も行っています。

この保存整備事業と関連して、日本と朝鮮半島との交流に暗い影を落としたこの戦乱の反省のうえに立ち、今後の両国の理解と交流を目的とした「佐賀県立名護屋城跡資料館(仮称)」の建設を進めているところです。

この報告書は、昨年に引き続き行った古田織部陣跡の発掘調査概要報告書です。古田織部は茶人として有名ですが、今回の調査ではこれまで調査してきた陣跡とは趣も異なっており、陣屋のひとつつの姿として新しい資料が提供できたのではないかと考えています。

「名護屋城跡並びに陣跡」は広い地域に点在しているため、地域開発との調整等課題は多々ありますが、地元の町や関係機関の御協力、文化庁・名護屋城跡並びに陣跡保存整備委員会の御指導・御助言を得て、今後とも本事業の促進に努める所存です。今後ともよろしくお願ひします。

なお、今回の調査に御協力をいただいた地権者の方々をはじめ、関係各位の御援助と御配慮に対し、厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

佐賀県教育委員会

教育長 堤 清行

例　　言

1. 本書は、国庫補助を受け昭和63年度から4カ年計画で実施している「古田織部陣跡発掘調査事業」に係る平成2・3年度の調査の概要報告書である。
2. 遺構の実測・写真撮影は調査員の他小笠松二・明瀬たまみ・山本りえ・松本美保が行い、遺構実測の一部は外部委託した。
3. 本書の作成は、中山芳子が製図を行い、調査員が行った

本文目次

I 調査の経過と概要	1
1. 調査の経過と周辺の環境	1
2. 調査の組織	2
II 遺跡の概要	6
1. 立地と遺構	6
2. 遺構の概要	8
III 小結	19

挿図・図版目次

Fig. 1 古田織部陣跡位置図及び周辺地形図	3・4
2 古田織部陣跡地形測量図及び調査区位置図(S=1/500)	5
3 古田織部陣跡遺構配置図(S=1/400)	7
4 S B04掘立柱建物跡実測図(S=1/100)	9
5 S B02掘立柱建物跡実測図(S=1/80)	10
6 曲輪Ⅱ周辺遺構配置図(S=1/160)	14
7 石段②実測図(S=1/40)	15
8 通路跡実測図(S=1/40)	16
P.L. 1 S B04掘立柱建物跡(南西から)	11
2 S B04掘立柱建物跡(北東から)	11
3 S B04掘立柱建物跡(東から)	12
4 S B04・02掘立柱建物跡(北東から)	12
5 S B02掘立柱建物跡(南東から)	12
6 曲輪Ⅱ(南東から)	13
7 曲輪Ⅱ南西側石垣(南から)	13
P.L. 8 石段②(南東から)	17
9 石段②(北東から)	17
10 石段②(北西から)	17
11 通路跡(南西から)	18
12 通路跡(北から)	18
13 通路跡(西から)	18

I 調査の経過と概要

1. 調査の経過と周辺の環境

文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱1592～1598年)に際し、日本側の拠点となった名護屋は玄界灘に面した東松浦半島北部に位置する。豊臣秀吉の居城である名護屋城を中心に半径3kmほどの圏内に全国諸大名の陣屋が120ヶ所以上築かれて、およそ400年を経過した現在もそれらの遺構が良好な状態で残存している。東松浦半島は、玄武岩質溶岩に厚く覆われた起伏の多い広大な大地であり、「上台場地」と呼ばれている。この半島の西及び北側は突出した岬と複雑な湾入をもつリアス式海岸で、天然の良港となっている。また、この地は壱岐・対馬を経て朝鮮半島とは約190kmの近い距離にあり、古代より文化流入の玄関口であった。このような自然の要因も文禄・慶長の役の本営地として選定された理由であろうが、名護屋の地を選んだ理由はいまだ不透明な部分が多い。

本県教育委員会では、この壮大な遺跡群の保存と活用のため、文化庁・名護屋城跡並びに陣跡保存整備委員会の指導・助言を受け、昭和51年度から「名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業」を県及び遺跡の所在する鎮西町・呼子町・玄海町の3町で実施している。保存整備事業のうち発掘調査・環境整備・石垣修理事業を県が担当し、特別史跡の追加指定・公有化事業を各町が担当し、鎮西町ではこの他詳細分布調査事業を行っている。昭和60年には保存整備事業の一層の促進を図るために「名護屋城跡並びに陣跡保存整備計画」を策定(昭和63年に改訂)し、平成4年度までの短期計画とそれ以降の長期的計画を決めている。これまでに陣跡では豊臣秀保・堀秀治・加藤嘉明陣跡の発掘調査及び環境整備を行い、事業開始から10年を経過した段階で名護屋跡に着手した。昭和62年の山里口発掘調査に始まり、昭和63年からは石垣の危険個所の保存修理を目的とした石垣修理事業を山里口・東出丸・遊撃丸と順次行っている。

120ヶ所以上にのぼる陣跡の規模は大小様々であるが、遺構の遺存状況によって遺存度Ⅰ(石垣・土塁等により、陣跡の全容が知られるもの)、遺存度Ⅱ(Ⅰに準じるが部分的に破壊を被るもの)、遺存度Ⅲ(痕跡のみ残すもの)、その他に分類しており、今回の調査対象である古田織部(重然)陣跡も遺存度Ⅰの陣跡である。名護屋城跡の南約500mに位置する古田陣跡の周辺には、前田利家・木下延俊・片桐且元・木村重隆・堀秀治・豊臣秀保・鍋島直茂等遺存度Ⅰの各大名の陣跡が分布し、歴史ゾーンのひとつとして重要な空間を形成している。特にこのゾーンの陣跡は、遺構の残存状況もさることながら知名度の高い大名の陣跡が多く、発掘調査・環境整備とともに史跡探訪ルートの設定など積極的な活用を図っていくことを保存整備計画に位置付けている。こうしたなか古田織部陣跡は昭和63年度の地形測量から調査を開始し、平成元年8月14日に鍋島直茂陣跡とともに特別史跡に追加指定され、同年から平成3年度まで発掘調査を行っている。古田陣跡の調査とともに、鎮西町教育委員会は木下延俊・片桐且元・木村重隆陣跡の詳細分布事業を行い、このゾーンの陣跡の様相が明らかに

なってきている。

古田織部陣跡の調査は、地形測量の成果を基に平成元年度に最も平坦面が広い曲輪Ⅰの3/4を行い、2年度に曲輪Ⅰの残り部分及び曲輪Ⅱとこれに続く通路部分を、3年度には曲輪Ⅰの石垣前面及び補足調査を行った。その結果、古田陣跡では、これまで調査してきた豊臣秀保・堀秀治陣跡主郭の礎石建物跡と異なった素堀の掘立柱建物跡・石段・通路・石垣等を確認することができた。

2. 調査の組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査事務局

総括	県文化課長	武藤佐久二(平成2年度)
"	天本 博 (平成3年度)	名護屋城跡調査研究室長兼務
" 参事	岩崎輝明 (平成3年度)	
" 課長補佐	" (平成2年度)	名護屋城跡調査研究室長補佐兼務
" "	森醇一朗 (平成3年度)	
庶務	庶務係長 永松和久 (平成2・3年度)	
" "	主査 濱野清子 (")	
" "	主査 小林宣洋 (")	
" "	主査 池田 学 (平成3年度)	
" "	主事 松瀬 弘 (平成2~3年度)	
調査	" 名護屋城跡調査研究室 室長	小宮睦之 (平成2年度)
" "	室長補佐 森醇一朗 (")	
" "	" 藤口健二 (平成3年度)	
" "	企画調整主査 東中川忠美(平成2~3年度)	
(調査担当)	" " 西田和己 (")	
" "	文化財保護主事 松尾法博 (")	
" "	指導主事 山口久範 (")	
" "	文化財保護主事 五島昌也 (")	
" "	" 本多美穂 (")	
" "	" 廣瀬雄一 (平成3年度)	

調査指導

文化庁記念物課

名護屋城跡並びに陣跡保存整備委員会

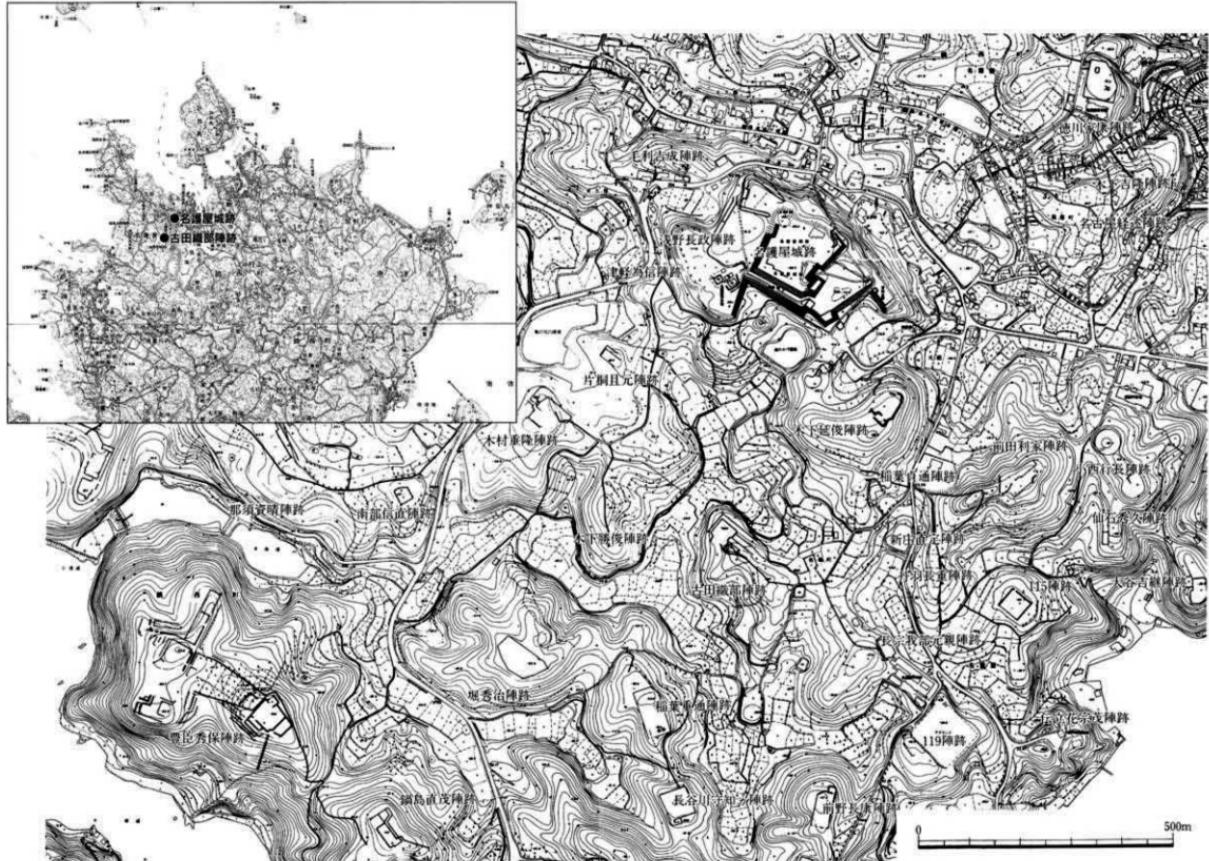


Fig. 1 古田織部陣跡位置図及び周辺地形図



Fig. 2 古田織部陣跡地形測量及び調査区位置図 (S = 1/500)

II 遺跡の概要

1. 立地と遺構の配置

名護屋城跡の周辺には標高約40~80mの丘陵が点在し、その間を谷水田が走る起伏に富んだ地形である。古田織部(重然)陣跡は、名護屋城跡から南へ下る谷水田の東側丘陵上にある。標高約53mの地点から北西に細長く延びるの丘陵(東松浦郡鎮西町大字名護屋字赤玉毛)に陣屋は構築されている。丘陵中央には標高約50~51mの細長い平坦面があるが明瞭な遺構は確認されず、この平坦面の北西側に平成元年度からの調査対象地である曲輪Iがある。曲輪Iは、丘陵先端の標高約50mの部分を削平し、北西・北東側は盛土を行い、標高約45mの平坦面を造り出している。三方を石垣で囲み、約2,000m²の広さを持つ。調査前はミカン畑で造成の際かなりの削平を受けていたため、平成元年度の調査では3/4の調査を行うに留まっている。今回曲輪・遺構の全体が判明したため、曲輪Iの主要遺構について改めて報告する。

曲輪Iで確認した遺構は、掘立柱建物跡、柱穴列、土壙、溝跡、集石、玉砂利、石段等である。掘立柱建物跡は4棟あり逆L字形に配置されている。この曲輪の中で最大規模のSB04掘立柱建物跡が北西側石垣に平行して建ち、この建物に直交してSB01・SB02掘立柱建物跡が並んで建っている。SB01掘立柱建物跡の北角に小規模なSB03建物跡があり、SK01・02土壙と切り合っている。SB01・03掘立柱建物跡から曲輪南東壁面に沿い、SA01・02柱穴列が平行して延びる。曲輪中央部に南東から北西方向に走る溝2条があり、SD01溝跡は、SB02掘立柱建物跡と切り合っている。集石は曲輪南側にあるが性格は不明である。玉砂利は南東側壁面近くに部分的に見られる。石段①は曲輪北西側にあり、幅も4.2mと広く、曲輪IIへの通路になっている。

曲輪IIは、標高約43.6mで曲輪Iとの比高差が1.4mある。南西側と北西側縁辺には石列が見られ、北東側は削平を受けているが、下段の平坦地に落石があることから、曲輪IIの三方は低い石垣で囲まれていたことがわかる。南西側は長さ11.5m、北西側は9.7mが残っているが、石段①との取り付きを考えると少なくとも11mの長さはあったと考えられる。曲輪IIの内部には小さな玉砂利やこぶし大の玉砂利が広範囲に見られ、瓦片も出土している。南西側のほぼ中央部にゆるやかな石段②が付き、曲輪IIから南西方向に出た後すぐ直角に曲がり南西側石垣に沿って通路が延びている。通路は、自然石を飛び石状に配置し、曲輪IIの南西側から北西側石垣の前面に残る旧地形部分を廻るように延び、途中から名護屋城本城方向と曲輪IIの南東側にある平坦面方向とに分岐する。この他、曲輪I北西側石垣前面の帯曲輪とそれに続く曲輪II北西側平坦地の調査を行っているが、曲輪I石垣の崩落が激しいため、明確な遺構は検出できていない。遺物は、他の陣跡同様少なく、石段①付近と曲輪II付近から瓦片が出土した他は、土師器の小皿が出土しているのみである。

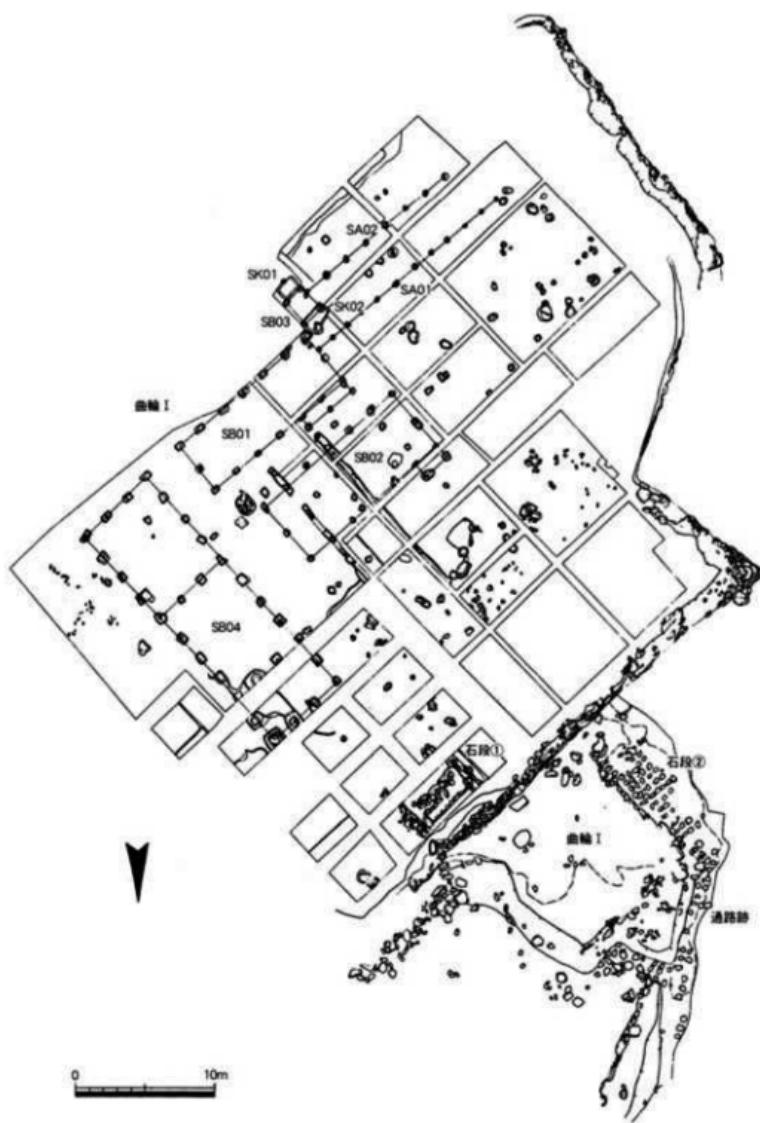


Fig. 3 古田織部陣跡遺構配置図 (S = 1/400)

2. 遺構の概要

曲輪 I の遺構は、平成元年度の調査で全容を掴めなかった掘立柱建物跡を中心に報告する。なお、掘立柱建物跡については、1間を 2m として以下記述する。

曲輪 I の東側部分に掘立柱建物跡は集中し、北西～南東方向に主軸を持つ大型の S B04 掘立柱建物跡があり、北東～南西方向に主軸を持つ S B01・02 掘立柱建物跡が並んで建っている。

S B04 掘立柱建物跡 (Fig.4. P L.1～4) は、最も規模の大きい建物である。規模は 6m × 20m (3間 × 10間)、建物主軸方位を N - 43° W にとる。梁行、桁行とも等間隔に柱穴が並ぶ。建物北西側から 4m (2間) と 12m のところに梁と対峙して柱穴が並び、建物を仕切っている。北東側から 6m × 4m (3間 × 2間) の 1 部屋とそれに続く 6m × 8m (3間 × 4間) の同規模の 2 部屋に分けることができる。柱穴の大半は風化玄武岩の地山を掘り込んだ素掘りのもので、建物の北隅柱付近は盛土による成形が見られ、柱穴も盛土部分から掘り込み地山面に達している。柱穴は、底面が縦 0.6m、横 0.5m 前後の平面長方形であり、柱穴の規模も他の建物跡に比べ大きい。

S B02 掘立柱建物跡 (Fig.5. P L.4・5) は、S B01 掘立柱建物跡の北西側、曲輪の中央部に位置する。規模は 5m × 12m (2間半 × 6間)、建物主軸方位を N - 49° E にとる。桁行は 1 間の等間隔に柱を配置するが、梁行は 2.5 間の二ツ割で柱間は 2.5m ずつである。建物の西隅に 1m × 2m (半間 × 1間) の張り出しがつく。建物南西側は張り出し部分まで入れるとちょうど 6m (3間) になる。建物北隅から 2 番目の桁方向柱穴は S D02 溝跡と、桁行の中間にあたる 4 番目の柱穴は S D01 溝跡と重なっている。柱穴は風化玄武岩の地山を掘り込んでおり、平面隅丸方形のものが多い。柱穴の規模は 0.2m ~ 0.3m とやや小さい。

S B01 掘立柱建物跡は、曲輪南東壁面に沿うように建っている。規模は 4m × 12m (2間 × 6間)、建物主軸方位は N - 48° E であり、S B02 掘立柱建物跡とほぼ同方位である。柱間は 1 間の等間隔に配置するが、S B02 掘立柱建物跡と同様に建物西隅に張り出しがつく。張り出し部分は、1m × 4m (半間 × 2間) と細長い。柱穴は、底面が縦 0.5m、横 0.4m 前後の平面長方形のものが多く、張り出し部分はひとまわり小さい。

この他、S B01 掘立柱建物跡・S A01・02 柱穴列があるが、前回報告しているためここでは概略を記す。S B01 掘立柱建物跡の南隅柱に隣接する 1.5m × 2m (3/4間 × 1間) と規模の小さい S B03 掘立柱建物跡があり、S K02 土壠と切り合っている。S A01 柱穴列は S B01 掘立柱建物跡に、S A02 柱穴列は S B03 掘立柱建物跡に、S B01 掘立柱建物跡と主軸方位を同じにして取り付いている。S A01 柱穴列と S A02 柱穴列の間隔は 3.6m、柱穴も 12 個と 8 個であり、互いに対峙していない。S A01 柱穴列は間隔が均等ではないが、S A02 柱穴列はほぼ均等である。柱穴の規模は掘立柱建物跡と比べると小規模である。

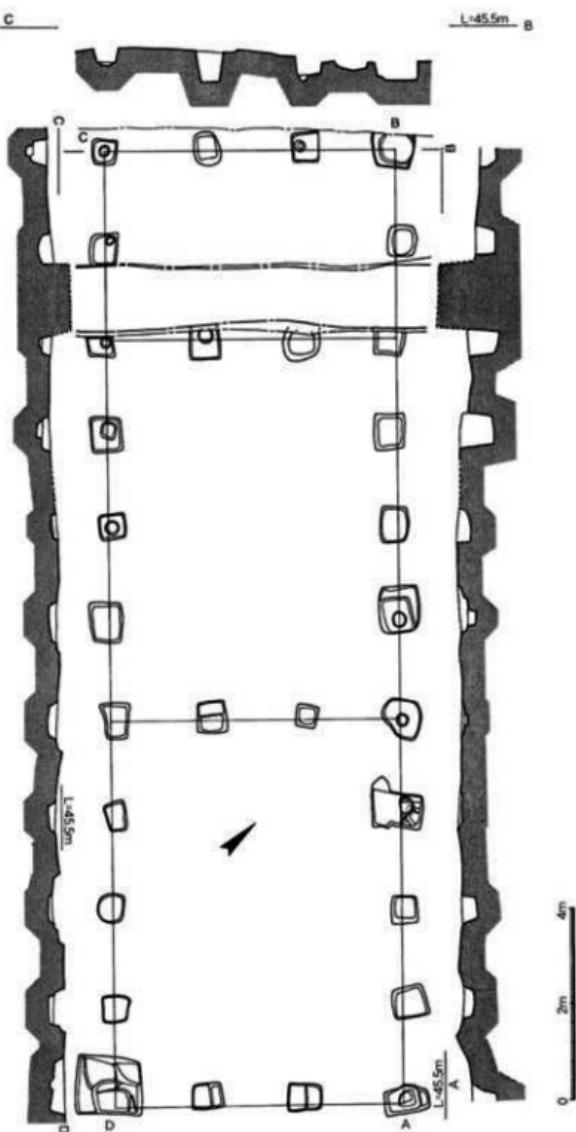


Fig.4 S B 04掘立柱建物跡実測図 (S = 1/100)

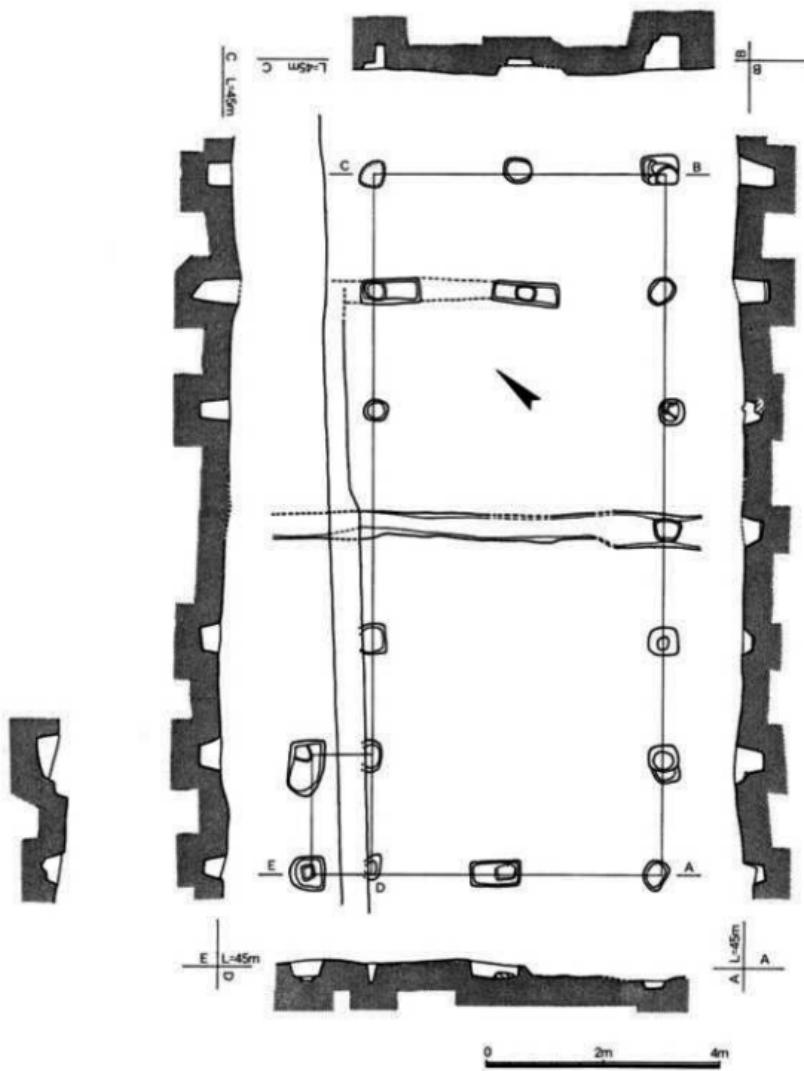


Fig. 5 SB 02掘立柱建物跡実測図 (S = 1/100)



P L. 1 SB04掘立柱建物跡（南西から）



P L. 2 SB04掘立柱建物跡（北東から）



P L. 3
S B04掘立柱建物跡
(東から)



P L. 4
S B04・02掘立柱建物跡
(北東から)



P L. 5
S B02掘立柱建物跡
(南東から)

曲輪Ⅱ(Fig.6, PL.6)は、北東側が削平を受けているものの、南東側と北東側の縁辺部に石列が見られる。南東側縁辺部の曲輪Ⅰ石垣前面4.5mに石段②があり、石段②から曲輪西隅まで石列が続いている。石は立てて使い西隅付近は1石しかなくその下部は土のままであり数段積んだ形跡は見られない(PL.7)。北西側縁辺部も同様であり、曲輪Ⅱは縁辺を低い石列によって形づくられている。曲輪内部には玉砂利が散布しているのみで、曲輪北東隅に取り付く石段①から石段②までの通路としての機能の他には、見あたる遺構はない。

石段②(Fig.7, PL.8~10)は、曲輪Ⅱから通路跡を結び、地形を利用し緩やかな段を造っている。石段の幅は3m(1間半)、曲輪から外に地形を利用して0.3m×0.4m程の自然石を配置し、曲輪Ⅱに直交して5~6段造り、そこから直角に曲輪北西部縁辺に沿って石段を造っている。曲輪外側の3m×3mの範囲に逆L状に巧みに石を配置している。この部分の石段は蹴上げが高いところで約0.2mある。曲輪北西部縁辺に沿った南東~北西方向の石段は、長さ8mの間で高さ1mを下るように石を配置し、段を造っている。石段の踏面には小さな玉砂利を敷き詰めている。

通路跡(Fig.8, PL.11~13)は、石段②が曲輪Ⅱの西隅外側から北へ延びる部分を通路跡とした。通路跡は、石段②の石と趣が違い、直径0.4m程の平面円形の扁平な自然石を飛び石状に配置している。通路西側は削平のためか急激に落ちており、残存状況から石は3列ほど並んでいたのではないかと推定できる。通路跡は、曲輪西隅外側から17m以上北へ延びるが、曲輪側の1列で17mの間に25個の石が確認できるが、石が抜かれているところもあり、この間には28個あったと考えられる。曲輪西隅外側から7mのところで、曲輪Ⅱ北東側平坦面へ入るように二手に分かれている。また、高さは17mの間に1.4m下るように石を配置しているが、分岐点を過ぎたところから斜面はきつくなり、そのまま名護屋城跡方面の谷水田へと降りていっている。石段②と同様、石と石の間には小さな玉砂利を敷き詰めている。



PL. 6 曲輪Ⅱ(南東から)



PL. 7 曲輪Ⅱ南西側石垣(南から)



Fig. 6 曲輪II周辺造構配置図 (S = 1/160)

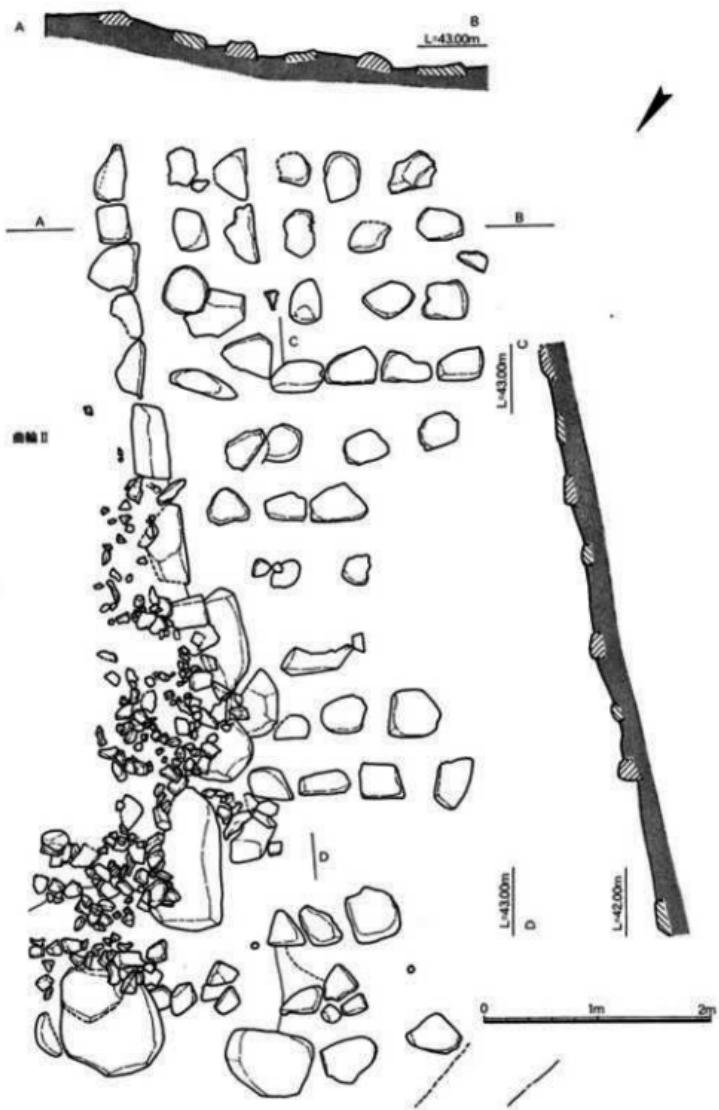


Fig. 7 石段②実測図 (S=1/40)

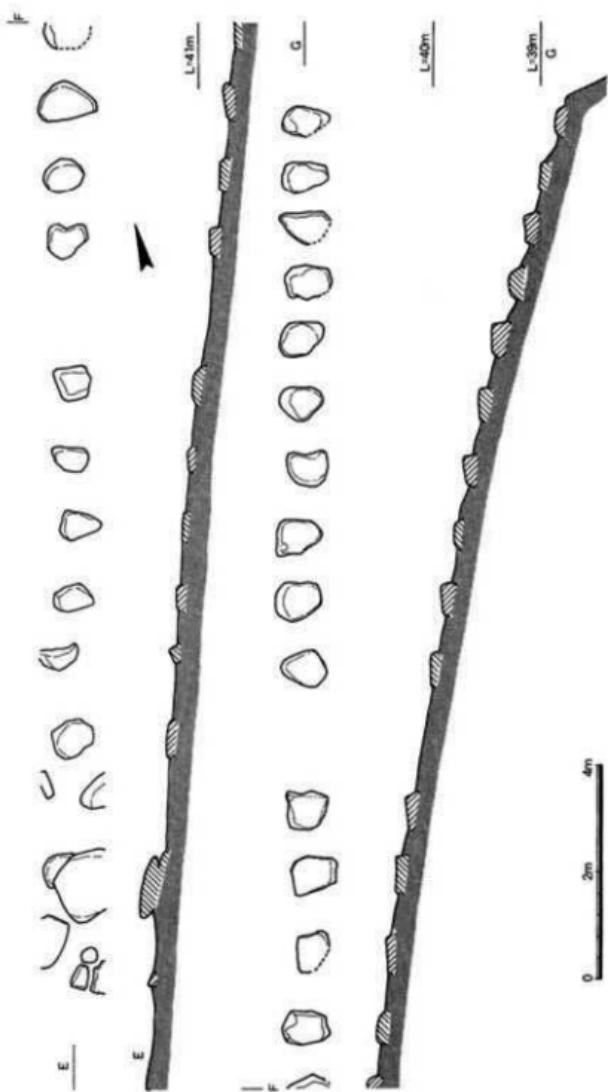


Fig. 8 通路跡実測図 ($S = 1/40$)

P L. 8
石段②
(南東から)



P L. 9
石段②
(北東から)



P L. 10
石段②
(北西から)





P L. 11
通路跡
(南西から)



P L. 12
通路跡
(北から)



P L. 13
通路跡
(西から)

III 小 結

名護屋城跡並びに陣跡保存整備事業において豊臣秀保・堀秀治・加藤嘉明陣跡に続く4番目の陣跡として発掘調査を行った古田織部陣跡では、これまでの陣跡とは違った雰囲気を持っている。確認した遺構は、掘立柱建物跡、柱穴列、土壙、溝跡、集石、玉砂利、石段、通路跡・石垣等である。ここでは調査結果を簡単にまとめてみる。

- ① 丘陵頂部には明確な区画は確認できず、丘陵先端部を造成し、標高45mの曲輪Ⅰを造っている。曲輪Ⅰ南東側は丘陵を垂直に近く切り落として壁とし、北西側を盛土成形し、周囲を石垣で区画する。
 - ② 石垣は、曲輪Ⅰ北隅角は半分程度残存するが、そこから延びる北東側石垣及び北西側石垣はかなり崩壊している。
 - ③ 曲輪Ⅰの南西側に曲輪Ⅱが付き、曲輪Ⅰの北東側に帯曲輪が走る。
 - ④ 曲輪Ⅱに面する石垣は、石の広い面を表に出した石材を意識的に數々所配置し、その間に小ぶりの石材を5~6段積み変化を持たせている。
 - ⑤ 曲輪Ⅱの石垣も石を立て、石面を見せている。
 - ⑥ 曲輪Ⅰと曲輪Ⅱは石段①で接続し、曲輪Ⅱから石段②と通路跡が続き、通路跡は帯曲輪と名護屋城方面とに分岐する。
 - ⑦ 曲輪Ⅰでは、掘立柱建物跡・柱穴列・土壙・溝跡等が曲輪の東半分に集中し、建物前面は、広い空間を持っている。
 - ⑧ 4棟の建物は、全て掘立柱建物跡であり、柱間は2m(約6尺5寸)を基準としている。SB04掘立柱建物は6m×20m(3間×10間)と最も規模が大きい中心建物であり、建物主軸方位N-43°Wにとり、主軸方位をほぼ同じにして平行に建つSB01・02掘立柱建物跡を逆L字に配置している。
 - ⑨ SB04掘立柱建物跡は3室の仕切り、SB01・02掘立柱建物跡は西隅に張り出しが付く。
 - ⑩ SD01・02溝跡はSB02掘立柱建物跡の柱穴と切り合い、合わせて溝の方向は建物の梁と平行する。
 - ⑪ SA01・02注穴列はSB02掘立柱建物跡の主軸方位と同じであるが、柱穴は対峙しておらず柱穴の規模も小さい。
 - ⑫ SK01・02土壙はSB03掘立柱建物跡と切り合い、SA02柱穴列とも接している。
- 以上の調査結果を若干考察してみたい。

まず、今回の調査区が古田織部陣跡の中心となる主郭かどうかである。丘陵の中で最も曲輪が明確な部分であり、確認された建物跡の規模も大きく、これまで調査している豊臣秀保・堀秀治陣跡の主郭建物と比較しても規模で遜色はない。「秀吉公名護屋御陳之図ニ相添候覺

書」等文献によると、古田織部は文禄・慶長の役に際し後備衆として300騎の軍勢で名護屋の地に参陣し、朝鮮には渡海していない。軍の規模は大きくななく、今回の調査区が主郭である可能性は高いが、背後の丘陵平坦地にも玉石が見られることから、断定はできない。もうひとつは、通路跡のことがある。今回確認した通路跡は、曲輪Ⅱの外側で帶曲輪と名護屋城跡方面とに分岐し、名護屋城跡へ延びる通路は名護屋城跡と正対する。これは堀秀治陣跡の大手口が名護屋城跡と正対することから大手の可能性は残すが、自然石を飛石状に配置し石と石の間は玉砂利を敷き詰め露地の趣もあり、メイン通路かどうかはさらに検討の余地が残る。

古田織部陣跡調査の大きな成果としては、掘立柱建物跡がある。6m×20m(3間×10間)、5m×12m(2間半×6間)、4m×12m(2間×6間)の3棟は、豊臣秀保・堀秀治陣跡の主郭建物が礎石建物であったこと、堀陣大手曲輪の掘立柱建物跡とは規模や性格が違うこと等、陣屋のあり方を知る上で貴重な資料となった。建物の性格については、今後の陣跡調査による類例の増加や各大名領地の城郭資料の調査を待つて比較しなければならないが、S B04掘立柱建物跡は内部に仕切りがあること、S B01・02掘立柱建物跡は建物西隅に張り出しが付き出入口の可能性もあること、S A01・02注穴列はS B02掘立柱建物跡の主軸方位と同じであり建物群と密接な関連にある施設であること、建物前面は広い空間を持ち庭の存在を推定できること等特徴も多い。

古田陣跡の調査は今年度で終了し、今後環境整備の具体的検討に入ることになっている。

※註 中村質「史料解題」『名護屋城跡並びに陣跡 3』佐賀県文化財調査報告書第81集
佐賀県教育委員会 1985年

特別史跡 名護屋城跡並びに陣跡

古田織部陣跡発掘調査概報 2

発行 佐賀県教育委員会
〒840 佐賀市城内1-1-59

発行日 平成4年3月31日

印刷 日之出印刷株式会社

